

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



大恵山分教会

昭和11年1月31日 設立

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。



立教186年
2月号

大教会長様お話

ひながたを学びなおし

全員参加の年祭活動を

1・20年頭会議において

立教186年大教会年頭会議は、1月20日午後1時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会会長夫妻・布教所長らが参集した。

大教会長様は、先ず、真柱様年頭のごあいさつを拝読され、その要点が「肝心なのは我々の心の成人」・「教祖の年祭は全教の節目」であるとして、年祭の意義を徹底するための心構えについて思いを述べられ、続いて、大教会の活動方針・目標を定めるにいたった経緯を縷々述べられた。

なお、恒例の会食はコロナ禍のため中止し、引き続き「教会長夫妻並びに布教所長講習会」(別掲)が開催された。要旨は次の通り。

まず、今年頭の真柱様のごあいさつを拝読します。

昨年中は、いろいろとおつとめく
ださいまして大変ご苦労さまでし

た。

昨年は、年が明ければ教祖百四十年祭への三年千日の動きが始まるというので、論達を出しまして、そして年が変わって、年祭へ向かって仕切ってつとめる期間に入ったのであります。

仕切ってつとめるということ
は、年祭という目的に向かって集中してつとめるということでありまして、この期間は、普段よりも力を入れて成人を進める旬であります。

成人という言葉は、皆さん方は、その信仰的に意味するところは、あらためて言うまでもなくお分かりであります。ここにそんな人はいないと思えますが、成人という、即物的に考えて、嫌気が差すという人もあるようであります。しかし、肝心なことは心の成人であり、そのための教祖のひながたでありますから、ひながたを目標に歩もうということ論達で申し合わせているのであります。おつとめを勤めてご守護を頂くのも、人が話を聞き分けるようになってくれるのも、つとめる者の

心の成人ということが大きく関わっていると思うのであります。

教祖の年祭は、私たちが最終的に目指す、親神様が思召される陽気ぐらしの世の中へ向かうための一つの区切り、節目という意味合いをもつて勤めてきたと思うのであります。陽気ぐらしへの道のりは、人間の心の成人の道であります。考えてみたならば、非常に長い話であって、何もなければだらけてしまうか、忘れてしまうということもあり得るのであります。そこで、身近に区切りを設けて集中的につとめる。そうして、ひと節目ひと節目、芽を出していくようにつとめることが必要ではないかと思うのであります。

節目というのは、いろいろにあります。所属する教会の歴史の中においての節目。また個人の人生においての節目。節目というのは個人的にも集団としてもいろいろあります。教祖の年祭は全教の節目であります。だから、全教の人が年祭の意味を知って歩めば、歩む人が増えれば、最初から分かっている人だけがつとめるより

も、一手一つの力も大きくなり、それだけ成人の道を進ませてもらうことができると思うのであります。

そこで、年祭の意義を徹底するために、まず現在は、本部巡教を行っているのですが、巡教だけがすべてではなく、意義徹底のためにいろいろな方法を取り続けていかなければならないと思うのであります。皆さん方は、そのための心配りをする教会や部署などの責任ある立場にいるわけであります。

年祭へ向かって進むときは、全教が一手一つにならなければならぬときであります。一手一つの芯となるもの、何に一手一つになるかといえ、それは教祖の親心であり思召であります。お互いは、教会や施設、部署などでは、いわば芯という立場にあっても、芯となる思召に心を寄せてつとめる立場にあるということについては、ほかの人たちと同じであります。教祖の親心に応えることができるように、それぞれの務めを果たしていったいだきたいと思いま

す。

コロナもいまだすっきりと収まらず、また世の中も、戦争などで不安定な様相であります。そういうなかで三年千日へ向かってのスタートを切ることになりましたが、この年が、良いスタートを切る年でありたいと思っておりますので、心を合わせてつとめてくださいますように、よろしく願いしたいと思えます。

年頭に当たって、あいさつときせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(みちのとも 186年2月号4頁)

立教186年、明けましておめでとうございます。

昨年、教祖140年祭に向かう道すがら、理づくりとして「人だすけのためのおちばがえり」を目標に、それぞれ、一生懸命にお努めくださり、誠にありがとうございました。

今年、はいよいよ、教祖140年祭への三年千日活動、その1年目を迎えました。

このスタートの年を互いに勇ませあい喜ばせあつて通り、三年千日をしつ

かりと通り切れるように、本日は、年頭における真柱様のごあいさつと、笠岡大教会としての年祭活動の方針・目標についてお話しします。(拍手)

▼肝心なのは我々の心の成人

真柱様の年頭のごあいさつのなかで、私は、大きく2つのことが重要だと思えます。

1つは、「肝心なことは(我々の)心の成人であり、そのための教祖のひながたである」ということ。

「おつとめを勤めてご守護を頂くのも、人が話を聞き分けるようになってくれるのも、つとめる者の心の成人とすることが大きく関わっている」と話されました。

お互いは、教会長や布教所長など、それぞれの信仰の拠点での中心となる立場です。

この年祭活動の芯となる私たちこそ、教祖のひながたをしつかりと学び、まず、自らが成人することが大事だと思います。

▼教祖の年祭は全教の節目

もう1つは、「教祖の年祭は全教の節目であり、年祭の意味を知つて歩む

人が増えれば、一手一つの力も大きくなり、それだけ成人の道を進ませてもらうことができる。／全教(の人)が一手一つにならなければならぬ。その芯となるものは教祖の親心であり思召である」ということ。

論達の冒頭にも、

立教百八十九年、教祖百四十年祭を迎えるにあたり、思うところを述べて、全教の心を一つにした

とあるように、道の教えに繋がる全員の方に、それぞれに違いはあるにしろ、それこそ誰一人余すことなく、「年祭活動、頑張ろう／何かさせてもらおう」という心になつてもらふことが大切だと思えました。

▼意義徹底のために

続いて、「年祭の意義を徹底するために、本部巡教を行っている。巡教だけがすべてではなく、いろいろな方法を取り続けていかなければならない」とあります。

笠岡大教会としても、11月21日に本部巡教を受け、1月、直轄教会に対して、大祭参拝と兼ねて全教会一斉巡教を取り行い、論達と年祭活動の意義の

徹底を図りました。続いて、2月・3月には、部内の教会にも回ります。

それだけではなく、その後もしっかりと、それぞれの教会に繋がる全員に、年祭活動の大切さを伝えることを、続けていかなければならないと思えます。

「巡教終えたから、これで全員に伝わった」ではなく、大教会としても、引き続き、論達と年祭活動の意義の徹底を行なっていきたいし、それぞれの教会・布教所でも同様に、そこに繋がる皆さん方、一人ひとりに、年祭活動に自ら参加して成人の歩みを進めてもらえようように働きかけましょう。

「全員」というのは「1人残らず」ということで、すなわち、教会に繋がるようばく、信者はもとより、おさづけを戴けない年齢の子供たちにもということです。

その子供たちにも、まず、年祭活動というのが大事な期間で、我々大人が「頑張っている／こんなことやっている」という姿を示すと同時に、何かしら動いてもらえるような声を掛けましょう。

恥ずかしながら、私自身は、子供の頃の教祖年祭活動の記憶というのがほ



年祭活動に臨む心構えを述べられる大教会長様

め、それから、それぞれの教会でも目標と実践項目を定める、という流れになっています。

昨年末に、大教会としての方針と目標を発表しました。

諭達を受け、大教会として、何を打ち出していくべきか相談したときに、とにかく「教祖のひながた」を、三年間、しっかりと迎えようというので、「つながろう、おやさまのお心に。つなげよう、信仰の喜びを。」を活動方針とし、目標を「ひながたを学び、そのお心を実践しよう。」と決めました。

年頭の真柱様のごあいさつを拝聴して、あらためて、この方針・目標で間違いなかったと思えました。

あえてお話ししますが、諭達・本部巡教を受けて、私がそれまででイメージしていた年祭活動というのは、正直、違いました。

混乱されるかもしれませんが、私は、昨年この場で、「理想の教会像」について、地域社会に溶け込んで地域に必要とされて、そこに繋がる皆さんがおたすけに喜んで向かっている、そんな姿を夢想するとお話ししました。

その後、昨年、『みちのとも』に掲載された両統領先生の対談を読んで私

がイメージした年祭活動は、「とにかく、おたすけ。では、この現代社会では、具体的には、どのようにおたすけ相手と繋がっていくのか。そのことを、年祭活動として打ち出していく。」そんなイメージでした。

教会によって様々で、どんなことができるかも違うでしょうが、これまでにいかにいかけ・おたすけ、路傍講演やパンフレット配りでは、現代社会においては、実際に、おたすけ相手と繋がるのがなかなか難しいと思います。

もっと具体的に、別の形で、おたすけ相手と繋がることのできる方法を模索していけないか。――例えば、教会でのことも食堂などの先に、おたすけする相手と繋がる姿を思い描くといった、おたすけ相手と繋がる具体的なこと、何か新しい方法(路傍講演や戸別訪問ではない)を提示したり、共有していく。――そんな形をイメージしていたので、本部巡教を受けた時点で、年祭活動をどうしていけばいいのか、正直、全く分からなくなりました。

そこで、年祭準備委員会のメンバー10人を集め、私の考えや思いを話したうえで相談すると、今回の三年千日の具体的な大教会の活動として出てきた

のが、「教祖のひながたをテーマとして、それを毎月、発信していく」というものでした。

これが、本当にいいなと思って、そこから、とにかく、「ひながた」に重きをおいた、今回の方針と目標を決定することに繋がったわけです。

そして、真柱様の年頭のごあいさつを拝聴した今、現時点では、「方針と目標、間違っていないかったな」と感じています。

私が、それまで思い描いていたイメージがなくなったわけではありませんが、このたびの年祭活動は、やはり、ひながたに重きを置いて、もっと基本的なことをするべき旬だと思ったので、そういう方針・目標になりました。

▼年祭活動の重点

会長として初めての年祭活動を迎えるにあたり、私は、正直、「どんなことが起こってくるんだろう／どんな喜びを見せていただけるんだろう」という不安や期待もあります。

「成人の旬」であるこの三年千日には、間違いない、普段より多くの節や身上・事情、慶び事も見せていただけたらと思います。

▼ひながたを目標に歩もう

このたびの年祭活動、年祭に向かっては、まず、大教会の方針と目標を定

とんどありません。今の年齢になって、子供のときに、親がしていたことを知っておけばよかったと後悔していません。簡単なことではありませんし、「せなあかんのや」という押し付けになってもいけないと思いますが、分らないなりに、子供たちにも、少しでも、年祭活動の意義、易しく言って「空気」でも伝えていけるように、それに向かって努力しましょう。

この3年間をしっかりと通り切るには、本部巡教で井筒先生が仰ったように、とにかく、教祖を見失わないこと。教祖さえ見失わなければ、ご存命の教祖が間違いなく導いてくださる。

そのためにも――教祖のひながたを「もう知っている／十分学んできた」という方もおられましようが、あらためて――教祖のひながたに込められた親心を学びなおし、そのお心を実践して、互いに成人を進める。

そんな三年千日になるように、この3年間は、とにかく、「ひながた」、これをしっかりと辿りましょう。

それも、自分だけで努めるのではなくて、教会・布教所に繋がる全員に――子供たちにも、まだ見ぬ新たなおたすけ相手にも――伝えていけるように、互いに勇ませあい喜ばせあつてお通りいただきますようお願いいたします。

最後に、連絡事項を、3件、お伝えします。

1件目…2月・3月の部内巡教ですが、しばらく実施できませんでしたので、しばらくぶりの巡教になります。

このたびは「全教会二斉巡教(論達

巡教)」として行います。祭典を終え、ひとまず区切ってから、決められた式次第に則って勤めますので、祭典後の巡教に重きを置いてください。

基本的には、従来の部内巡教同様、巡教員がおつとめ衣でおつとめを勤めます。祭典後、式次第のなかでお話を取り次ぎ、食事接待は無しで帰るという形で勤めます。

コロナ禍もあり、教会によって様子も事情も違うでしょうから、教会によつては、弁当を準備したり、あるいは、巡教員がおつとめの終わり頃に到着して、背広・スーツでお話を取り次いで帰るといったケースもあるかと思いますが、一斉巡教(論達巡教)の講話の取り次ぎに重きを置いたうえで、具体的なことは、それぞれの教会で巡教員と相談してください。

2件目…学生担当委員会から。今年の3月28日に本部で開催される春の学生おぢばがえりには、笠岡として初めて団体を組んで参加します。

論達にあるように、「ぢばを慕い、信仰を受け継ぎ、引き継いでいく」とことを考えれば、学生に対する行事も非常に重要ですので、笠岡に繋がる学生が、1人でも多く、おぢばに教祖に繋

がるように、皆さま方には、ぜひ、動員の声かけをお願いします。

3件目…本部に提出する今年・立教186年の人づくりと御供・ご奉公の心定めについて。人づくりはそれぞれの教会からの数を合計したもので、御供は昨年と同様に心定めしましたので、ご承知おきください。

このたびの年祭活動、一人ひとりが、教祖のひながたを学び、そのお心を実践し、あらためて、成人の歩みを進めようということと、笠岡に繋がる全員、どんな方にも、もう、1人も余すことなく、残らず、年祭活動に、少しでも



殿内北側半分は椅子席となった

参加して、共に、成人できるように、このことをお願いして、私の年頭にあつたつてのごあいさつといたします。

(拍手)

《以上要旨》

春季大祭講話

教祖にお喜びいただける

真心をもつて取り組もう

大教会長様

立教186年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よぶぼく・信者ら参拝のもと執り行われた。

大教会長様は、教祖年祭の元一日を記念してつとめる春季大祭に当たり、正に、年祭活動が開始したこの旬の心構えとして、論達・真柱様年頭のごあいさつ・逸話篇を引用され、まず、「笠岡の心を一つにして歩むこと」「自らの心の成人を進めること」を促された。

続いて、教祖にお喜びいただける「真心をもってつとめること」「心のほこりを払えるように通ること」に気を付けようと述べられ、

最後に、このたびの笠岡としての活動方針・目標への取り組みについて述べられた。

前日の年頭会議同様、終始、即物的な考え方ではなく、心の持ち方・置所に重点をおいた講話となった。要旨は次の通り。

ただ今は、立教186年の春の大祭を、皆さまと共に陽気に勇んで勤められました。誠にありがとうございます。本日は、教祖140年祭に向かっての三年千日と仕切つての年祭活動期間を歩むにあたって、思うところをお話します。(拍手)

▼笠岡の心を一つにしたい

昨年10月26日、真柱様より『諭達第四号』が發布されました。この諭達と本部巡教を受けて、笠岡大教会としての方針と目標を決めました。

このたびの諭達では何が一番大事かと考えると、笠岡の方針・目標を知っている方の多くは、おそらく「ひながた」が思い浮かぶと思いますが、私はそれと同じか、もっと大切だと思うことがあります。

それは、諭達の冒頭にある「全教の

心を一つにしたい」ということです。真柱様は、今年頭のごあいさつのなかで、

年祭へ向かって進むときは、全教が一手一つにならないければならないときであります。一手一つの芯となるもの、何に一手一つになるかといえ、それは教祖の親心であり思召であります。

と話されました。教祖の親心・思召を芯として、全教が一手一つになる、このことを、三年千日の年祭活動を歩むに当たって、私は、とても重要なこと、大事なことで、皆さんにお願いしたい。

このたびの年祭は、「自らが勇んで通る」のはもちろんのこと、「年祭活動を、身の回りの方にも伝えて、共に、成人の道を歩もう」ということです。全教の心を一つとするために、まず笠岡として、一手一つに、心一つにできるように努めましょう。

教会・布教所や家庭に繋がる方、とにかく身の回りの方一人ひとりに、誰一人漏らすことなく、どんな形でもどんな小さなことでもいいので、自らが求めて年祭活動を努めてもらえるように、その意識を持って、3年間通り切

りましょう。このことを、まず、最初に、私の思いとしてお話ししました。

▼まず、自らの心の成人を

特に、次の世代を担う子供たちに、伝えていきましょう。

もちろん、押し付けになってはいけないし、「しなければならぬからしろ」と声高に叫ぶのではなく、「子供たち一人ひとりを見て、「この子ならどう言ったら伝わるだろうか」と思い巡らし、伝える努力をして、「少しでも、どんな小さなことでも、親神様が、教祖が、喜んでくれるんだよ。それでたすけてもらえるんだよ。」と伝えて、ともに歩む3年間にしましょう。

「子供の成人」という逸話ですが、教祖の仰せに、

「分からん子供が分からんや、親の教が、届かんや。親の教が、隅々まで届いたなら、子供の成人が分かるであろ。」と、繰り返し繰り返し、聞かして下された。お蔭によって、分からん人も分かり、救からん人も救かり、難儀する人も難儀せぬやうの道を、おつけ下されたのである。

(逸話篇196)

とあります。

また、年頭のごあいさつでも、真柱様は、

おつとめを勤めてご守護を頂くのも、人が話を聞き分けるようになってくれるのも、つとめる者の心の成人ということが大きく関わっていると思うのであります。と話されました。

まず、自分自身の心の成人を進めたいうえで、進めながら、同時に、子供に、また身の回りの人たちに、教えを伝える声かけを行なっていく、ということ、心がけましょう。

▼年祭に向かう心構え

そのことを、まずお願いしたうえで、この3年間、通るうえで注意点、「今さら、そんなことを」と思われるかもしれませんが、あえてお話しします。2つあって、1つは「どのような心で努めるのか」ということ。もう1つは「心のほこりをしっかりと払って通る」ということです。

▽何事も真心をもってつとめる

どのような心で通るのかということについて、教祖の逸話を拝読します。

真心の御供

中山家が、谷底を通っておられた頃のこと。ある年の暮に、一人の信者が立派な重箱に綺麗な小餅を入れて、「これを教祖にお上げして下さい。」と言って持って来たので、こかんは、早速それを教祖のお目にかけて。

すると、教祖は、いつになく、「ああ、そうかえ。」

と、仰せられただけで、一向御満足の様子はなかった。

それから二、三日して、又、一人の信者がやって来た。そして、粗末な風呂敷包みを出して、「これを、教祖にお上げて頂きとうございます。」と言って渡した。中には、竹の皮にほんの少しばかりの餡餅が入っていた。

例によって、こかんが教祖のお目にかけて、教祖は、「直ぐに、親神様にお供えしておくれ。」

これは、後になって分かったのであるが、先の人は相当な家の人で、正月の餅を搗いて余ったので、

とにかくお屋敷にお上げしようと言うて持参したのであった。後の人は、貧しい家の人であったが、やつのことで正月の餅を搗くことが出来たので、「これも、親神様のお蔭だ。何は措いてもお初を。」というので、その搗き立てのところを取って、持って来たのであった。

教祖には、二人の人の心が、それぞれちゃんとお分かりになっていたのである。

こういう例は沢山あって、その後、多くの信者の人々が時々珍しいものを、教祖に召し上がって頂きたい、と言うて持って詣るようになったが、教祖は、その品物よりも、その人の真心をお喜び下さるのが常であった。

そして、中に高慢心で持って来たようなものがあると、側の者にすすめられて、たといそれをお召し上がりになっても、

「要らんに無理に食べた時のように、一寸も味がない。」

と、仰せられた。(逸話篇7)

このように、教祖は、品物ではなく、真心を、何よりも喜ばれる。それは、

御供物に関することだけではなくて、教会でのおつとめ・お掃除、にをいがけ・おたすけなど、私たちの、日々の全ての行動の根底にある心が、教祖にお喜びいただける心で何事もさせていたかどうかということ。

▽心のほこりを払えるように通る

そしてもう1つは、心のほこりを払って通るということ。これも、逸話のなかで、こんな風に、教祖が仰っています。

どんな新建ちの家でもな、しかも、中に入らんように隙間に目張りしてあってもな、十日も二十日も掃除せんなら、畳の上に字が書ける程の埃が積もるのやで。鏡にシミあるやろ。大きな埃やったら目につくよつてに、掃除するやろ。小さな埃は、目につかんよつてに、放っておくやろ。その小さな埃が沁み込んで、鏡にシミが出来るのやで。(逸話篇130)

と。

親神様のお心に添わない心遣いを、「ほこり」に例えてお教えいただいています。道を信仰する我々は、おつとめを勤め、おさづけを取り次いで、

日々通るなかで、心のほこりを払う機会は、何度もあると思います。

なぜ、あえて、今、この話をしたか。――ある女性が健康のために走っていたが、体調を崩して医者に診てもらった。「筋力が低下している」と言われた。

健康のための運動だったので、使っていた筋肉が違ったので、調子を崩す元になり、鍛えていたはずなのに、全然鍛えられていなかった。――この話を聞いて、私が、さらに思い浮かんだのは、私が、本部勤務から大教会に帰って、神殿掃除をするようになったときに、とても気になることがあった。

――毎日、掃除しているのに、太鼓とスリガネの足の部分に白いほこりがずつと溜まったままになっていた。それは、ほこりを隅に寄せて終わるような掃除の仕方になってしまっていたから。――私は、特に、神殿掃除することとは、「自分の心のほこりを払う」つもりで努めているので、余計に気になったのでしようが、「しているつもりで、実は、ほこりを溜めてしまっている」ということが、私たちにも、あり得ると、そのように思案しました。

このたびの記念祭に向かつては「ひながたを学び、そのお心を実践しよ

う。」という目標を掲げています。

当然、承知しているであろうこの教祖のひながたを、あらためて、学んで、自分自身の心の掃除の仕方、ほこりの取り方が、ほこりを隅っこに追いやるような掃除になってしまっていないかを、あらためて、確認して、スッキリ、そのほこりを払えるよう、努めていたできたいうえから、このお話をしました。

▼笠岡としての方針

このたびの教祖年祭に向かっては、10月26日に真柱様より、『諭達第四号』をご発布いただき、11月21日に本部巡教を受けました。

その後、年祭準備委員会を立ち上げ、年祭に向かう方針と目標を相談し、決定しました。

活動方針は「つなごろう、おやさまのお心に。つなげよう、信仰の喜びを。」目標は「ひながたを学び、そのお心を実践しよう。」と定めました。

▽つなごろう、おやさまのお心に。

このたびの諭達の根底にあるのは、ひながたを辿ることだと考えました。が、「ひながた」というと、「貧に落ち

きる／ご苦労」など、「苦労をしなければならない」というようなイメージがあるという意見もあったため、「ひながた」という言葉を使わずに考えてみました。

そうして、「あのとき、教祖はどうなさったのか／どんなお気持ちだったのか／教祖ならどうなさるか」そういったことを想像してみ、常に教祖を思い浮かべ、教祖のお心に繋がろうとする態度が、ひながたを求めることになるのではないかと思いたったので、方針を「つなごろう、おやさまのお心に。」としました。

▽つなげよう、信仰の喜びを。

また、お道を通るうえで、喜び、「かしの・かりもの／生かされて、生きていく喜び／元なるをやを明かさされていること／たすかる筋道を教えられていくこと」、教えを知っていることと喜べることは、たくさんあることに気がきます。

そして、その湧き上がる喜びを態度に表すことがひのきしんであり、周囲の人々に喜びを映していくことが、いがかげやおたすけだと思えます。

さらには、この喜びを次代へ繋げて

いくということ。——「道は末代」。諭達にも、

親から子、子から孫へと引き継いでいく一歩一歩の積み重ねが、末代へと続く道となるのである。

とあるように——「末代」に信仰の喜びを繋げていこうという思いを込めて、「つなげよう、信仰の喜びを。」としました。

▽ひながたを学び、

そのお心を実践しよう。

目標は「ひながたを学び、そのお心を実践しよう。」です。

これまでの年祭活動は、数値目標を掲げ、その達成に向けて奮起を促してきたという歴史があったかと思えますが、年祭活動は「しないといけない」ものではなくて、飽くまでも「させてもらおう」という勇み心とするものだと捉え、このたびは、具体的な数の目標は掲げず、皆さんが、それぞれに、何をするかを決める。そのために、このような表現にしました。

ひながたを学んでいく手段、1つの方法として、大教会では、教祖をテーマにした「KASOKA ひながた通信」というものを作り、毎月、発信します。

ポスターがお手元に届いているかと思いますが、その右下にQRコードが2つあります。1つは、昨年末に作った笠岡大教会のホームページにアクセスするためのQRコード、もう1つは、この「KASOKA ひながた通信」にアクセスするためのものです。最初はLINEの友達登録をすることになります。

毎月1日に、教祖のひながたから1つテーマを選んで、それに基づくお話をすることになっています。

この「QRコード」は、スマートフォンでそれを読み込んでアクセスすることになります。それが、ご自分でできなくても、近くに居る若い方でしたらできると思いますので、お子さんやお孫さんに、「これ見たいけど、分かんねえよ」と言ったら、操作して一緒に見せてもらうこと、これも次代に信仰を繋げていくための一助になるでしょう。また、スマホで見られない方には、紙に印刷したものを配布しますので、それぞれの教会ごとに、希望数・必要数を大教会にお申し込みください。

そしてもう1つ。このたびの年祭活動では、「おたすけ・お願いカード」を活用していただきたい。

このたびは、「必ず大教会にお供えする/数をカウントする」ということはしません。それぞれの教会で、どのように活用するかを考えて、使ってください。大教会にお供えしたい教会は、大教会の方で、それを受付して、月次祭のおつとめが始まる前に、それを供えて、おつとめを勤めます。

▼ご存命の教祖を見失うことなく、

「一手一つにつとめよう

真柱様の「全教の心を一つにしたい」という思いに沿うことができるよう、まず、笠岡が、「一手一つとなつて努めたいと思います。

一手一つということについて、おさしづに、

一手一つに皆結んでくれるなら、どんな守護もする。(明治31・1・19)

また、

皆んな一手一つの心が無けりや、治まつても治まらん。(明治32・7・23)

また、

皆心、一つの心に成りてくれ。一つに成れば強いもの。そもくの心は、どうしてやろうこうしてやろう、と言うたとて、出来ん。そ

ここで暇が要る。もうこれから、皆心というは、一人の心によろあれだけの心を揃うたなあというは、世界にどんな事も映る。これをよろう皆々の心に持つてくれにやならん。(明治37・12・14)

とあります。論達の最後に、

この道にお引き寄せ頂く道の子一同が、教祖の年祭を成人の節目として、世界たすけの歩みを一手一つに力強く押し進め、御存命で

お働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい。とあるように、一手一つに、喜ばせたい勇ませあつてつとめ、三年千日を通り切り、御存命の教祖にご安心いただきお喜びいただけるように、お通ります。ただきますよう、お願いいたします。

最後にもうひとつだけ。年祭活動期間に入りますと、いろいろなことが起きてくると思います。それは、慶び事、うれしいこともあれば、身上・事情や、しんどいな辛いなど思うことも数多く起こってくると思います。

ですが、11月21日の本部巡教で井筒

先生が、私たちは、教祖さえ見失わなければ、どんななかでも教祖が支えてください、「存命の理」で、間違いないと導いてくださる、と話されたように、教祖を、教祖のひながたを見失わずに、しっかりと見つめて、そのお心を学び、自ら実践していくことをお願いして、お話を終わります。(拍手)

以上要旨

教会長夫妻 並びに 布教所長講習会 開催 1・20年頭会議に引続き 布教部

布教部(田中隆之部長)は、年祭活動歩み出しの大切な時間に、笠岡が一丸となつて年祭活動を推進するために、教会の童頭である教会長・その配偶者・布教所長の合力は外すことが出来ないとして、「教会長夫妻並びに布教所長講習会」を開催。杉江健二先生(甲賀部属美張分教会長)を講師に招き、「多様化する社会の問題を学び、自分にできるおたすけに取り組もう」をテーマに次のようにお話しいただいた。

今日は、天理教の教会は現代社会において用無しになっていくんでしょうか、このまま消えて行くんでしょうかというようなお話をさせていただきましたと思います。ちよつと質問に答えて下さい。これから道に明るい未来はありますか？ これからの道に明るい未来はありますか？ Y.E.S.と思う人、じゃあ未来があると思われたかたはなぜそう思うんでしょうか。ちよつと心に浮かべてみてください。また未来はないと思つた人はなぜ未来はないと思つたんでしょうか。なぜという所を深めていかなないとはいけません。どちらでもいいですが、ただ現状は非常に厳しいものはあります。教祖80年祭90年祭をピークにおさづけの理拝戴の人数なんです、客観的に見ると右肩下がりになつています。大事なものはなぜそういつたことになつてきたのかという事です。

伝統宗教は、生老病死という人間の根源的な悩みに応えてきました。新興宗教においても、貧病争、このテーマに答えを出している宗教が伸びたんです。お道は結核のおたすけで伸びたと言われますが、教祖80年祭90年祭はそういつたものに一生懸命かかれればおた

すけを待っている人々が大勢いました。釣りに例えると、今、一生懸命にをいがけておたすけをしようと思っ
ている私たちの船の下には魚はいない
んです。困ってる子達はそこに困って
ないんです。今は保険もある、病院は
立派にある、医学も発達し、以前困っ
ていた結核は現在ほぼありません。そ
ういう中で私たちがおたすけしようと
思っていたその人達、今日は魚はそこ
にいないで移動してしまっただけです。
バブルがはじけ教祖100年のあたり、
1980年ぐらいから、助けを求め
る魚達はそこにはいなくなっ
てしまっ

た。私たちが一生懸命おたすけしよう
と思っ
てやっ
ているその下には魚はい
ないんです。じゃあ困ってる人はい
ないのか、いるんです、別のところに。
ある時、前真柱様とお話をさせて頂い
てる時に、「世の中にはなお助けを待っ
てる人は大勢いるのに私たちがようぼく
はそこに行けてないで」って言われた
んです。これが実は教勢が伸びて行か
ない原因の1つなのではないでしょ
うか。

私たちの思いばかりではおたすけは
現実には起こってこないんです。天理
教と全く接点がない方そして天理教の

教会もしくは教会長様ようぼく信者と
接点がある方、うちも子ども食堂やっ
てますが、こども食堂に来る人たちと
向き合い、おたすけ活動を展開しなけ
ればならないことによりやく気付い
た。私たちはもう一度、お道を知らな
い人たちと接点を作って何に困って
るのか聞かなきゃいけないと思いま
せんか。

私がおたすけのことに気づいたのが130年祭
の3年前、ちょうど10年前からその思
いに駆られて少しずつ躓きな
がらやってきたことを少しご紹介をし
て、何かのご参考になればということ
でお話を聞いていただきたいと思いま
す。まずは2011年、今から12年前
に私は空手道場を始めたのですが、生
徒の保護者から、「先生うちの子供学
校行けてないんだけど先生の空手教室
は行くんですけどどうしたらいいです
か」ってご相談を受けたんです。そし
て不登校のおたすけを始めた。よく調
べてみると世の中には不登校ってのが
いっぱいいて19万人、このコロナ禍で
今24万人にもなっているんです。年間
30日以上欠席を不登校と言いま
す。不登校気味の子どもたちも含め
ると、なんと52万人もいるんです。どん

どんどんどん増えていきます。また引き
こもりや仕事をしないニートは合わせ
て177万人もいるということが分かって
きたんです。今のこの世の中で229万人
の人たちが引きこもり不登校ニートな
んです。この8年間に復帰した人は24
件、まだ継続してしているのは11件、
相談だけで終わった人16件、中断した
人15件、合わせて76件の不登校のお
たすけに関わってきました。その中で教
会に住み込んだ人は14名ありました。
そんなことでお助けにばかり初席運
ん
だ人が30人、ようぼくになった親が10
人、講社を祀った人もあります。

そして10年前、130年祭の三年千日の
始まるそのタイミングで、親の代から
やっている里親、空手道場など得意な
ことをやろうということ、陽気会と
いう名前を付けて子どものおたすけを
始めました。私は里親をしているので
すが、今までに59人の子どもを預かっ
てきました。そのうちの8割の子ども
たちが虐待を受けていた。そんなこ
どもたちと一緒に生活しながら、このま
までいいのだろうかと思うようになり
ました。そうするうちに名古屋市の児
童相談所がうちの教会の隣に移転して
きました。その児童相談所で一時保護

されている建物から、「ママ、マ
マ！」と叫ぶ女の子の声、「殺せー、
殺せー」とわめく男の子の声が聞こえ
てくるんです。過去に殺されそうに
なった体験がトラウマになって叫んで
いるんです。私はおたすけのつもりで
虐待された子どもたちを預かってきま
したが、教祖が望まれるのは虐待を受
ける子どもたちのいない世の中にな
り、私たちのような里親がいなくなる
ことだと思っようになりました。

児童虐待が社会に知られるにつれ、
国が策を講じてきたにもかかわらず、
30年間増え続ける児童虐待の防止をこ
の時は決意しました。名古屋市の市
長に会い直談判して、児童虐待の再発
を防ぐための保護者支援事業つてのを
始めたんです。虐待をしたお父さんお
母さんに、虐待だめだよって言うだけ
じゃなくて、教えてあげるから一緒に
勉強しよう。本当に心から訴えれば、
天理教とかそんなの関係ない、通じる
んです。皆さんも笠岡市の市長さん
のところ、こんな事業をしたいと行か
れたらどうですか。名古屋市の委託で
講座の講師をやっていますが、17人の
うち15人が天理教の教会長か奥さんな
んです。そして今までに400件以上の虐



映像を駆使して話される杉江先生

待した家庭を復帰させてきたんです。その中から、もっと早く教えてもらいたかったという声上がり、イライラしない子育て講座、名古屋で年間2千人ぐらいの人が受講しています。私ひとりで始めたんですが仲間を募って、トレーナー養成講座を始めました。現在、600人の方が全国にいますが、まだまだ増え続けています。東京教務支庁、大鳥大教会でも開催されました。笠岡大教会も是非いかがでしょうか。さらに、天理教里親連盟とタッグを組んで、イライラしない子育て講座にちよつとお道の信仰を加えて、TFA天理教ファミリーコミュニケーションアプローチ

ちつてのを作ったんです。全国の教会や修養科の課外授業でも取り入れられています。これは親になってから学ぶよりも親になる前に学んだほうがもつといいでしょう。そこで産前子育て教室制度化を思い立ち、この必要性を国に訴えるために署名活動をしてきました。

教会長になった当初は何をしたらいいかわからなかった。路傍講演するけど素通りするだけ、にをいがけにまわるが誰も聞いてくれない。これでいいのだろうか、世の中の人たちは困っていないんだらうかって思っていました。不登校、ひきこもり、虐待、依存症、現代のおたすけはいっぱいありました。ただ私たちが気づかないだけなんです。そういう人たちにもつと目を向けましょう。子育てにつまづいて悩んで役所などに相談に行く親は実は2割程度です。8割の人が諦めてるんです。子育てに悩む人々に声をかけて、地域の子育てステーションの役割を教会が担えるということを目指して皆さん覚えておいてください。教会ではそれ以外にも、子ども食堂、フリースペース、里親活動などができます。人手がなければ近所から呼んでくればいいでしょ

う。何でもいからやれることからやっていきましょう。そして困ってる人のところに行かなければいけない。一生懸命頑張ってますが、魚がいないところで一生懸命やっても自分たちの自己満足でしかない。困っている人はたくさんいるので、そこへ行きましょう。いま社会は、子ども家庭庁が今年の4月にできますが、霞が関でその審議官と話をしてきました。すると、僕らが思っていることと全く同じことをやりたいと言っているんです。ということは、我々お道はそれができるといふことです。天理教の教会や布教所は、今まさに国や地域が必要としている社会資源になり得るといふことを話したかった。

最後になぜ私がここまでできるようになったのか、そのお話をします。私には男の子が3人いるんですが、待望の女の子を授かりました。本当に嬉しかったのですが、娘は重い障害を持って生まれてきました。何とか助けていただきたいとおさづけを取り次ぎ、六座のお願いも初めてしました。しかし時がたつにつれ体には水が溜まり、見るも無残に膨れ上がった。もうこれが神様の

私たちに与えられたと言ったらまた出直してくればということ。NICUで先生達が私達夫婦と娘3人のスペースを作って下さって、生命維持の器具を全部外して、今から出直しを迎える時間を過ごさせてくれたんです。娘の体をさすりながら、本当に申し訳ない、かわいいそうだななどいろんなこと考えました。でもこのままで終わったらお道の者じゃないって、この節をどう乗り越えるか、心を定めよう。この子を出直しを無にしないための心を定めよう。と定めたのが、生かしの道、ということなのです。娘は五体満足で出直したけれども、世の中には五体満足で生まれてきながら学校に行けず引きこもりがあったり、いじめがあったりして生き生きと学校に通えない子供たちがいっぱいいる。そして親から叩かれ怒鳴られて、寂しい思いをしている虐待にあった子供達が20万人もいる。この子たちを生き生きとして生きてよかつたって思える子供にしようというのを生かしの道と私は定めたんです。娘の出直しの節がなければ私はそこまでのエネルギーは湧いてこなかつたと思います。

そうして始めたおたすけですが、

いっぱい教会に不登校の子達を預かって、どんどんみんな元気になっていったんです。周囲からは先生先生と呼ばれて調子に乗っていた私なのですが、あろうことか私の長男が不登校になってしまったんです。辛かったですねえ、もうおたすけやめようかと思いましたが。助かりますよって言っときながら自分の子供見てみなさい。お母さんごめんなさい、うちの子供も助けられんような私ですよってカミングアウトしようかと思っただけ、どんどんどんどん来るもんだから言えずに心が悶々としてるんです。本当に心が折れそうに苦しかったんです。そんな時にちょうど春の大祭に上級の会長さんが見えなくなった。私は初めて自分のたまらない思いを吐露したんです。そしたらです、すねうちの上級の会長さん、何て言っただと思いませんか。何にも言わず涙ぼろぼろと流してくれたんです、こんな私のために。滅茶苦茶嬉しかった。恥ずかしながら男泣きに泣きました。そしてその日の祭典はめっちゃくちゃ勇みました。子供何も治ってないですよ、ただ心が元気になった。そこで私は大きな間違いに気づいた。私は単なる不登校の専門家だった、おたすけ人じゃ

ない。知識だけだった。本当に我々がするのはおたすけ、不登校の専門家の仕事するんじゃない。それ気づいて、それから私は全員の親に、すみません私の子供が不登校になってるんですよ、そんな私でも話していいですかと。そしたら相談は減るどころか増えたんです。そんな杉江さんだからこそ私の苦しみを聞いてほしいんだと。これがおたすけなんです。支援とおたすけの違いをその上級の会長さんの態度で教えていただいたということなんです。まずはおたすけの現場に近づくように、こちらから探すということが大事だと思います。私たち人間には欠点にばかり目が行く習性がありますが、良いことに着目しましょう。天理教の教会元気がないですけど、でもいいとこいっぱいあるんです。だっておたすけの心持つてる人がこんなにいるじゃないですか。世の中みんなお金くれなきゃ仕事しません。ボランティアの人だって、ほめてくれなきゃやらないんです。お道はどうですか、文句言われたって、ありがとうございますってひのきしん精神でやるじゃないですか。最後に平櫛田中の言葉ですが、今やらなければいつやるんでしょうか、

私がやらなかったら誰がやるんでしょうか。おたすけの接点の様々なチャンネルづくりをして下さい。この努力は必要なんです。周囲にあなたのおたすけを待っている人は必ずいます。天理教の教会や布教所は現代社会において本当に必要な場所になれる可能性が高いんです。ぜひチャレンジしていきましよう。

「テッチャン
シアター」開催
春季大祭後
少年会

少年会笠岡団(森本忠善団長)は1月21日大教会祭典終了後、今年初となるテッチャンシアターを開催させて頂きました。土曜日という事もあり子供たちも多く参加してくれました。

コロナ禍と言う事もあり、接触などは避け、「まねっこ遊び」や「頭の体操」、ハンカチを使ったゲームなどを行い終始、笑いが絶えない楽しい時間となりました。

ありがとうございました。

(少年会委員 丸山 智 旬)

📌 詰所からのお願い

詰所での宿泊・喫食について

- ・詰所で宿泊・喫食される場合は、「教会名・代表者名・泊数・食数」を、**2日前までには、必ず詰所**へご連絡ください。
- ・**食事をしない(宿泊のみの)場合**でも、2日前には申し込みをして下さるようお願い致します。

部内教会・信者に徹底願います。

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様には「月日にわにんけんはじめかけたのわよふきゆさんがみたいゆへから」と紋型ないところからこの世と人間をお創造になつたばかりでなく子ども可愛い一条の親心から今も変わる事なく成人へとお導き下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共はお聞かせ頂いた御教えに込められた親の思いにお応えしたいと日夜御礼を申し上げますと共に御恩報じを思い念じてたすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております その中にも今日の吉日は 今月二十六日教祖が世界ろくちに踏み均しに出られた尊い日柄におちばで春の大祭が執り行われるその理に「当教会でも只令からおつとめ奉仕人一同 おつとめをつとめられる喜びと感謝の心も一人に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 立教百八十六年の春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には今日の日を樂しみに寒さ厳しき中も厭わず寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 尚も変わらぬ親心にお縋りする状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本年は 教祖百四十年祭に向かう三年千日と仕切つての年祭活動の最初の年であります 今月は直轄教会に一斉巡教を行い諭達の精神と年祭活動の意義の周知徹底を図りました 続けて二月三月と部内教会にも一斉巡教を行います 笠岡で定めた「つながろう、おやさまのお心に。つながよう、信仰の喜びを。」の活動方針と「ひながたを学び、そのお心を実践しよう。」の活動目標のもとそれぞれの教会でも目標と実践項目を定めて年祭活動を推し進め、存命の教祖にご安心頂きお喜び頂けるよう努め励ませて頂く所存でございます

何卒親神様には どんな中でも親を信じて慕う皆の誠真実の心をお受取り下さいまして お望み下さる陽気づくめの世の状に一日も早く立て替わりますよう御守護お導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百八十六年 春季大祭 祭典役割表

祭主		祭主		指図方		三月講話	
鷹者	中島誠治	岡崎真一	赤木素志	杉原善朗	上原繁道	上原志郎	上原志郎
役割	区分	坐り勤	前半	後半	講話	大教会長様	上原志郎
地方	佐藤道孝	山野弘実	武内清明	虫立生	中村義太郎	大教会長様	中島誠治
おつとめ	大教会長様	前会長様	中村道徳	吉岡誠一郎	前奥様	大教会奥様	上原繁道
てをどり	前奥様	横山小智榮	門脇加津	谷内美知子	田中ますみ	前奥様	前奥様
笛	岡崎真一	杉原善朗	岡崎治喜	岡崎治喜	中村初美	横山小智榮	横山小智榮
ちゃんぽん	中村剛	上原浩	岡崎治喜	岡崎治喜	中村初美	横山小智榮	横山小智榮
拍子木	吉岡壽	今川昌彦	赤木素志	赤木素志	中村剛	横山小智榮	横山小智榮
太鼓	谷内伸自	田林久嗣	内海敏教	内海敏教	中村剛	横山小智榮	横山小智榮
すりがね	三島渉	高木昭祥	渡邊隆夫	渡邊隆夫	中村剛	横山小智榮	横山小智榮
小鼓	岡崎治喜	佐藤真孝	上原繁次	上原繁次	中村剛	横山小智榮	横山小智榮
琴	佐藤香苗	森本富美子	三島照美	三島照美	中村剛	横山小智榮	横山小智榮
三味線	武内正美	岡崎豊子	山野なつ	山野なつ	中村剛	横山小智榮	横山小智榮
胡弓	上原順子	室悦子	田中つかさ	田中つかさ	中村剛	横山小智榮	横山小智榮



先月、近所の信者家庭で2年前にご主人を亡くした84歳の女性が出直され、月次祭前日に葬儀を行った。子供は女性2人いて1人はすでに嫁いでいたのだが数年前に癌で亡くなり、残されたもう1人の女性が母親と2人暮らしをしていた。姉・両親と続けて身内を失い一人ぼっちになった娘さんは頼れる人もなく出棺前には棺に縋る姿に周りの涙を誘った。葬後霊祭後、自宅に仮社を据えると娘さんが母親の遺書かメモの様なものを見せてくれた。「結婚は失敗だった。新築してから私の居場所はなかった。」その様子をずっと見てきた娘さんは母親の気持ちが手に取る様に分かっていたのだろう。亡くなった姉の子供、姪に当たる子とはとても仲良しの様子で五十日祭には2人だけの参列という。何とか納得のいく人生を送ってほしいと願うばかりで私に出来る事があれば力になりたいと思った。

隣・近所であっても中々家庭の中まで知る事がなかったのは、自分がそれだけ気にする気持ちが薄かった事、またそうした態度になっていたかもしれない事など反省し、いつも変わらぬ態度で挨拶する事から助け合える関係が築ける様、この三年千日の間で少しでも自分を成人させられるよう頑張りたいと思う。

(む)

春の学生おぢばがえり

日時：令和5年3月27日～28日

参加費：5500円（現地参加3500円）

持参品：お泊りセット・はっぴ

筆記具・保険証（コピー可）

常備薬・席札（別席を運ぶ人）

宿泊先：笠岡詰所

奈良県天理市田町16

TEL 0743-63-4747

日程

●3月27日（月）

8：15 笠岡大教会集合・出発

12：30頃 天理到着・昼食・参拝

グループタイム

笠岡詰所泊

●3月28日（火）

10：00 式典（本部中庭）

12：00 直属アワー

16：00 天理発

20：00頃 笠岡大教会着

●申込・問い合わせは

笠岡学生担当委員会 上原繁次まで



KASAOIKA

